

大正十年二月九日生

軍歴 昭和十四年一月十日

昭和十五年十二月

歩兵隊第四〇  
連隊入營  
陸軍中野学校

入校

昭和十六年七月

関東軍情報部

配属

昭和二十年八月

興安省白城子

武装解除

昭和二十年十一月

入ソ ハバロ

フスク収容所

昭和三十一年十二月二十六日

興安丸 復員

現全抑協鳥取県連合会郡家町支部長

(鳥取県 松下 盛一)

## 私の人生

鳥根県 伊藤善隆

### 一、就職

昭和十五(一九四〇)年三月一日鳥取県米子市旧国鉄米子駅(現JR)に採用になり、朝六時発の列車に乗車すると石炭列車の箱型客車で黒煙を吐きながらタンガタンと毎日の通勤で米子駅には七時三十分に着、八時から朝礼と点呼で一日の任務が伝達された。

現在は電車でスピードが要求され一時間で走る近代車両である。それでも当時から軍需景気で、安来市の旧安来製鋼所(現日立安来工場)に通勤する工具の皆さんで車内はいつも満員であった。昭和十六年十二月八日、大東亜戦争勃発とともに鉄道も軍事輸送で、現役、召集、志願兵の出発で毎日ホームは涙で別れる者、万歳万歳で笑顔で出征する志願兵のさまざまな姿を見て、私も数年後にはこの状況を頭に浮かべて勤務

したものです。

## 二、徴兵検査

昭和十八年六月徴兵検査で幸い甲種合格で、国のため、郷土のため、また家門の名誉であったし、職場でも祝福された。同級生の仲間は第一乙種、第二乙種と雑多であった。同年十二月八日親戚、隣組、地区有志で出征の宴会が開かれて、いよいよ兵隊になるんだと張り切ったの酒盛りであった。翌九日朝、二十一年間住み慣れた生家を発って、駅前には当時の村長、地区民、同窓生、小学生が日の丸の小旗で見送り、私達志願兵四人は同級生では一番早く出征し、駅頭では代表して力強く村民の皆さんに挨拶して車中の人となる。途中の駅から入隊する同年兵が乗車してきた。

昭和十八年十二月十日、待望の島根県浜田市西部第三部隊の営門を元氣旺盛に入場して営庭で点呼を受け、数百人の同年兵は各班に分散した。私は歩兵砲中队指揮班観測に配属されて古兵の案内で兵舎に入ると、同郷の先輩上等兵殿に「よう、伊藤」と、班内を連れて巡り説明を受けた。私達十八年兵は初めから中

支派遣兵として内務班でも割合待遇がよく、十二日間はお客様扱いだった。

## 三、中国大陸へ

昭和十八年十二月二十二日朝いよいよ兵舎を出発。面会所には両親が最後の見送りで約三十分ほど話ができしたが、どこへ行くかは秘密だった。

連隊から浜田駅までの約二キロメートルの沿道には市民、国防婦人会、親族、小学生等多数の見送りを受けて整然と行進した。思い出は今でも感動する。

列車は下関駅に到着。当時は旧国鉄経営の関釜連絡船興安丸に乗船、いよいよ日本本土とはさらばである。十二月二十三日夕方釜山港着。初めて見る外地列車は日本の客車より一型大きく、五人掛けの座席。朝鮮半島を北上、旧満州を経由、いよいよ中国大陸と列車は進行する。昭和十八年十二月二十八日、南京街南京中央第一兵站宿舎に到着。

昭和十九年一月元旦を南京で迎える。当地で教練行軍の毎日であった。

文芸春秋社発行の「南京大虐殺」のまぼろし、昭和

四十七年十二月鈴木名著者によると、上官の殺人ゲームとかでA少尉は八十九人、B少尉は七十八人とか。昭和十二年二月首都南京を攻め落としたときに起きた、中国側は軍民合わせて数万人の犠牲者が出たと推定されるが、いまだに事件の真相は誰にも知られていない。

昭和十九年一月二十九日南京出発、揚子江（現長江）を船で上流途中九江等に寄港、同年二月上旬漢口着、列車にて孝感城に着く。当地から徒步行軍、途中は中国人の民家の土間で稲わらを敷いて仮眠をとる。昭和十九年二月十五日頃、待望の湖北省当陽県当陽の連隊本部に到着。第三十九師団長、陸軍中将澄田東四郎、中支派遣藤第六八六五部隊長、陸軍大佐山田正吉、私は歩兵砲中隊長、陸軍大尉武安勇に配属。十八年兵全員が連隊本部にて軍旗拜謁式に参列。初年兵の我々は初めて見る軍旗で軍人精神を一層強力に決意した。

連隊は、十三年、十四年、十五年兵は全部広島県出身で、十六年、十七年兵は鳥根県出身で、それはそれ

は毎日が大変であった。

昭和十九年二月から初年兵教育が始まり、広島県の古兵には言葉が出雲弁で発声するから殴られることが茶飯事。昭和十九年九月十三日には連隊本部で盛大に軍旗祭が行われ、我々初年兵には野戦に来て初めての祭り、午後は自由行動で先輩古兵に連れられて演芸会等を見て、夕食は中隊で会食の酒盛りで賑やかな一日であった。

昭和二十年二月頃から大々的な襄陽作戦が始まり、私達同年兵から各班を代表して五人が選抜されて参加した。私は指揮班で馬に機械を積んで出発。当時から米軍B二九機の空爆で、昼は山陰、民家の納屋に隠れては前戦に迫る約一カ月間の戦闘を終了して連隊本部に帰還。

昭和二十年五月、突然藤部隊は最前線を後方部隊と交代、日本国防衛のため反転命令。日増しに米軍機の空爆で昼間は民家、山陰で休み夜間行軍で、当時黄河は橋はなく板道を馬を連れて渡河、中国新郷駅から列車に乗車、私は馬と共だったので貨車に乗り旧満州四

平街に到着。暑い夏の七月末日、毎日戦闘訓練で汗を流す。同年八月九日日ソ戦が発表になり、楊木林の幕舎で被服類は新品に交換、戦闘の準備に入る。

昭和二十年八月十五日に停戦の詔勅。我々の中隊長 鎌本正喜大尉（現横浜市在住）は、日本国は戦争に負けた、これからは満州国の鉄橋道路を修復して、約二カ月で故郷に帰るから元気で働くように伝達。武装解除と軍旗は連隊本部で奉焼したとのこと。九月上旬に貨車に乗り北上する。

#### 四、シベリア大陸へ

昭和二十年九月二十五日頃、黒河駅に到着、黒竜江岸の幕舎に入る。連隊長の訓示はどこへやら……。滞在五日ほどで対岸のブラゴエシチェンスクに渡河上陸後またまた幕舎生活。九月末頃なのに十円玉ほどの霰が降って、その寒さは空腹とともに身にしみる。貨車に乗り込むと、上下二段の仕切りには家畜同様に板の床に毛布一枚。列車は北上する。ペロゴルスク駅に到着。車内では、運命の岐点はこのから東に走ればウラジオストックで日本に帰れる、西へ走ればモスクワへ

と話は続くが、汽車は西へと走る。貨車の小窓の隙間から見ると白樺林の雪原が続き、バイカル湖付近は大雪で空気も一段と厳しい。十月中旬カラガンダ駅に到着。中央アジア、カザフ共和国であった。

#### 五、カラガンダ炭坑の町

田満州国を出発して約一カ月の長旅だった。一五〇〇人の捕虜は各収容所に連行される。我々中隊は第八ラーゲルに入所。一回もソ連と戦争もしなかった兵隊達が、帰国もできない遠い遠い寒い大地に約一五〇〇〇人もの兵士が来たとか。先輩のドイツ軍捕虜がいたが、不備ながらも暖房があり恵まれた所内だったが、寝台は二段の板敷きで毛布一枚、南京虫にシラムがうようよ、夜の長いつきあいであった。炭坑は三交代の八時間労働。食事は黒パン一〇〇グラム、三回の食事は高粱または燕麦の重湯。汁はキャベツの葉っぱが泳いだスープが飯盒の蓋に一杯。二十歳代の兵隊には耐えられない給食。最初は週一回の休日も病氣、怪我等続出して半数近くが入坑できず、最初の約束はどこへやら、元気な兵隊は無休でノルマに追われる。

私は昭和二十一年三月頃、炭坑内で手の指を怪我して入坑を四日ほど休んだらマラリヤ病で高熱が発生、女医の診断で「オッカー」になり、当時の病人等々患者六〇人ほど、粗末な自動車に乗せられて約一〇〇キロ南のスバスコ第一ラーゲルに転送。ここにはドイツ、イタリアその他の捕虜が収容されていて、三月末頃には体調のよい者は麦畑の除草、ジャガイモの植付け等々軽労働をしていたが、何分弱体の身で毎日毎日死人が続出で大きな穴に全裸でポイポイ捨てたが、これこそ名前も分からず相当数亡くなられた。

昭和二十一年五月、休養十分でまたカラガンダに転送、次は第六収容所に入所。非常に大きな収容所で、旧中国の藤部隊や旧関東軍の混成隊で、知人は一人もおらず淋しい思いをしたが、とにかく頑張るしかない。

昭和二十一年九月、炭坑中隊の編成替えがあり、我々スバスコから来た一行は第四中隊に入った。昔の面影はないがお互いが仲よくなり、出炭率も一〇〇%以上で食事も非常によくなり、昭和二十二年になると

共産主義の教育が始まり、同調しない者は日本に「ダモイ」させないとの風評が高まり仕方なく習った。当時から少なからず給料も支給になり、煙草等は買えるようになった。

カラガンダ小唄

作詞 高田 敏雄

作曲 佃 紀三生

一、風が吹く吹く 空もすすける

ウラルふもとの 大和桜

粉灰さえまじり ここカラガンダ

この土地にさえ 花が咲く花が咲く

二、ロシア娘が 惚れては来ても

なんでなびくか 男の胸が

顔は粉灰に よごれていても

見せにやなるまい 大和魂 大和魂

(三、四番 略)

六、ダモイ

昭和二十三年になると給料は高くなり、タバコ、ウォッカ、酒等を買えた。

昭和二十三年七月下旬、私は右足の膝頭が腫れて女医の診断により「伊藤ダモイ」許可の命令が出たときは本当だろうかと頬をつねってみた。同部屋の戦友に挨拶に回った。

昭和二十三年八月上旬の夕方乗車、三年間住み慣れたラーゲルに別れを告げて、一路バイカル湖方面に向かって今度は東に東に。盛夏とは言え毛布一枚、大陸の気候も夜の寒さも何のその、同年八月下旬に待望のナホトカ港へ到着。身体被服の検査終了、第一分所に入る。またまたアクチブの連中から、お前は日本に帰っても敗戦で職もなく食べ物もない、ソ連同盟に残れと命令。だが誰一人残る者はないが、せっかくここまで来て間違いがあつても大変と一生懸命だった。第三分所では、飯盒に一杯の湯でカラガンダ出発以来の身体を拭き入浴を楽しんだ。

八月二十九日午後二時頃分所を出発、帰国船の待つ港へ。岸壁には日の丸の国旗を立てた永徳丸、船上には白い帽子に白い上衣を着た看護婦さんの姿を見て、まだ船に乗るまでは安心できない。午後四時頃だ

と思うが無事乗船完了。日本食の夕食の味。日本を出発して満五年の歳月は何だったろう。私達は昭和十九年兵の初年兵が入らなかったので最後まで初年兵だったことを力説する。でも元気で帰国できたので、昔の苦労は水に流して忘れること。

#### 七、日本国に上陸

昭和二十三年九月一日朝、美しい青い山々に皆で船上から合掌した。午前十時上陸開始。舞鶴港には白い割烹着の婦人会さん、近くの親族のお出迎え、兵舎での日本食で満腹と手続き。

昭和二十三年九月四日午前三時起床、最後の朝食。舞鶴駅発六時二十四分の列車で、無事故郷の駅に夕方六時三十分到着。駅頭には家族親類の皆さんで長い間御苦労さまでした。

#### 復員後の略歴

大正十二年四月二十三日生まれ

七人姉妹の長男

家族 夫婦、息子夫婦、孫（長男・次男・長女）の

七人

昭和二十三年十月一日 元の米子駅復職

昭和二十四年八月 島根県宍道駅に転勤

昭和五十四年四月一日 五十五歳定年退職

昭和五十四年四月 松江市水道局下請会社に就職

昭和六十年三月 合併のため退職

元宍道町固定資産評価審議委員一期

元宍道町農業委員三期

現宍道町ゲートボール協会副会長

現水利組合井堰管理組合長

シベリア会宍道支部長

神社責任総代 寺院総代

## 私のソ連抑留記

岡山県 田 中 一 司

昭和二十（一九四五）年八月九日、満州に侵入したソ連軍の命で鞍山製鋼所強制解体作業を終え、鞍山駅

発貨車にて奉天（瀋陽）駅に輸送した。ここで飯盒炊飯したが、逃亡者五百人が出たので輸送が厳しくなり、便所、食物受領以外は絶対下車させなかった。ところが、ハイラルで警察官約一千人を連行したので輸送が緩み、満洲里から入ソした。昭和二十三年六月二十七日まで三年七カ月の間、あのシベリア荒野の酷寒と飢えの中での強制労働を強いられた。この間の抑留生活を逐次記憶をたどりながら、労働、抑留中の出来事、思い出、私が見たソ連の感想等を書いてみる。また戦友たちの手記もあわせ、『平和の礎 シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦』にあらましのことは書いてあるので、特に印象に残ったことや書き漏らしたことについて述べてみる。

### 終戦

満州鞍山飛行場内戦闘指揮所で終戦の放送を聞いたが、無条件降伏など詳しいことは後日判明した。ソ連軍が満州の東部と西部から侵入してきたのであるが、西部侵入は飛行機観察で詳しく報告された。ソ連軍の服装、兵器などお粗末な兵隊さんが侵入して来たとい